

# 中島敦論

吉永智子

## 序論

中島敦は夭折した作家である。しかも、大学卒業後、約八年間は横浜で教師として勤務し、更に一年近くを南洋庁国語教科書編修書記として、当時、日本の委任統治領であった南洋諸島で過ごしている。創作活動自体は学生時代から行っていたものの、純粹に作家としてのみ活動した期間は、南洋から帰国して昭和十七年十二月に死去する迄の約半年間に過ぎないのである。

中島の父・田人<sup>たひと</sup>は、息子の死に際し、「哭児<sup>きうじ</sup>」と題する数首の歌を詠んでいる。次に挙げるのは、その中の二首である。

長かりし雌伏十年時到り將に雄飛せんとして吾が児は  
逝きぬ

いかばかりくやしかりけむいかばかり悲しかりけむ吾  
児の心は

晩年の息子は、父の目には、作家としての成功を前に「雄飛せん」としているように見えたと言ろ。また、中島の妻タカの手記<sup>註2</sup>にも、「書きたい、書きたい」「俺の頭のもののを、みんな吐き出してしまひたい。」と死の直前まで言い続けた中島の姿が記録されている。中島は大きな可能性を残しながら、円熟することなくこの世を去った作家なのである。

それにも拘らず、中島は没後五十年以上経った今日でも、多くの読者を得ている。主な出版社からは手軽な文庫本の形で出版されているし、彼の代表作の一つ「山月記<sup>註3</sup>」は戦後教科書にも掲載され、多くの人々に感銘を与え続けている。冒頭部分を暗唱出来る読者も多いと言ろ。

このような中島文学の魅力は何処にあるのか。歯切れの良い文体、古代中国・古代エジプト・南洋諸島などに題材を求めた舞台設定の面白さなど様々な理由が考えられるが、私は何よりその特異な登場人物像に中島文学の特色が

あると考える。現代社会を舞台とした作品では勿論のこと、古代社会や非現実的世界を舞台とした作品においても、主人公達は私達が若い頃に一度は抱くであろう「自分とは一体何者か？」という疑問に悩む、現代に通じる人物像となっている。それらの人物に対する読者の興味・共感が中島文学を支えているのではないか。一方で、未完長編「北方行」の挫折も、登場人物の造型に原因の一つがあるのではないか。

このような視点から、以下第一章では、中島文学の登場人物像に大きな影響を与えた中島の生い立ちをまとめ、第二章では、初期作品を習作期とその後の初期作品の二期に分け、登場人物像を中心に、中島が独自の文学を摸索して行く過程を明らかにする。また、第三章では、中期作品を概観した後、登場人物像を類型化し、その特色・変遷について検討する。第四章でも後期作品に関して、第三章と同様の方法で検討を行う。

結論で、私なりに中島文学の人物像の特色を浮かび上がらせることが出来れば幸いである。

## 本論

### 第一章 生い立ち（抄）

中島敦は、明治四十二年（一九〇九）五月五日、漢文教師の父・田人、母・千代の長男として東京市四谷区笹筒町に生まれた。誕生の翌年両親が離婚、明治四十四年八月には埼玉県久喜町の中島家に引き取られた。二ヶ月前に死去した祖父は儒者である。大正三年、田人は紺家カツと再婚。翌年六歳の敦は奈良県の父の家に引き取られ、以後、父の転勤により、小中学校の間、静岡県、朝鮮の京城市と転校を繰り返す。敦は、学業優秀で、快活な友情に篤い少年であったと言う。だが、父とは分かり合えず、家庭では孤独感を強めていった。田人は、カツの死後、三人目の妻・飯尾コウを迎えている。

大正十五年四月、第一高等学校に入学。翌年、肋膜炎で一年間休学する。喘息の発作はこの頃からあった。一高校友会『校友會雜誌』に寄稿、編集にも加わった。

昭和五年四月、東京帝国文学部国文科に入学。読書のほか、ダンスや旅行を楽しんだ。昭和六年には、後に妻となる橋本タカと出会っている。

昭和八年四月、東京帝国大学大学院に進学すると同時に、

横浜高等女学校の教諭となる。敦は機知に富んだ座談の名手として職員の人気と生徒の信望を集めたばかりでなく、子煩悩な父親でもあった。だが、愛すべき生活者の仮面の下で、常に「存在の不確かさ」と自ら呼ぶところの形而上学的不安に脅かされてもいた。

昭和十六年、転地療養と文学への志の為、横浜高女を退職。六月にはパラオに向け出発、南洋庁で勤務した。だが、氣候等が合わず、翌年三月の東京出張を最後に南洋庁を辞職、作家生活に入る。『文學界』二月号掲載の「古譚」<sup>註5</sup>は好評を博し、五月号掲載の「光と風と夢」<sup>註6</sup>は第十五回芥川賞候補作となった。七月には作品集『光と風と夢』<sup>註7</sup>（筑摩書房）が、十一月には『南島譚』（今日の問題社）が出版された。

旺盛な執筆活動を続けていた敦だったが、喘息の為心臓の衰弱激しく、十二月四日午前六時、三十三歳で死去した。

## 第二章 初期の作品集

中島の初期作品、特に一高時代の習作は、研究の対象とされることが少ない。それらが文字通り習作であって、當時文壇の流行であった新感覚派やプロレタリア文学の影響が大きく、後の中島文学に見られるような独自性に欠けていること、若い中島のロマンティズムが先に立って、や

やもすれば観念的になりがちであることなどがその魅力を半減させている理由であろう。だが、未熟さを感じさせる一方で、後の中島文学に連なる重要な要素を含んでいることも事実である。

この時期の作品は、内容・形式ともに多様で、序論で述べたような人物像の類型化は難しい。加えて、中島独自の人物像が構築され切っているとは言い難く、人物像のみを検討することが必ずしも有益とは思われない。従って、ここでは人物像も含めた初期作品の特色について検討することで、中期以降の中島文学理解の助けとしたい。

### 第一節 一高時代の習作

中島の一高時代の習作は、「下田の女」<sup>註8</sup>、「ある生活」<sup>註9</sup>、「喧嘩」<sup>註10</sup>、「蕨・竹・老人」<sup>註11</sup>、「巡査の居る風景」<sup>註12</sup>、「D市七月紋景」<sup>註13</sup>の六編で、何れも『校友會雜誌』に掲載された。

第一作「下田の女」は、失恋から神経衰弱になった都会の青年が伊豆下田でカフェーの女と知り合い、相手の男によってカメレオンのような豹変ぶりを見せるその女に驚かされるといふ物語である。伊豆下田という地名で思い浮かぶのは川端康成の「伊豆の踊子」、それから昭和二年春の中島の伊豆下田への旅行である。「下田の女」が発表されたのは十一月であるから、中島の下田への旅行体験が作品の根底にあると考えるとよく、そもそも旅行自体が「伊豆の

踊子」に触発されたものだったのかも知れない。実際「下田の女」には新感覚派的な擬人法や比喩が多用されているが、これは後年の中島の作品には見られないものである。但し、影響は受けていても単なる模倣に墮してはいない。この作品で注目したいのは女の描き方である。女は多分に観念的であるが、それは中島が旅行中期待していたような伊豆体験が得られなかった為、頭の中で造り上げた女性像だからであろう。そのような人物造型の弱さはあるが、後に大作「李陵」で効果を発揮する一つの物事をエピソードの積み重ねで多面的に描く方法がすでに試みられている。中島は一人の女を、狡猾な面、純粹な面など様々な面から描き、最後に読者の目の前に一人の謎めいた女を浮かび上げさせるという手法を用いている。作品自体の印象は薄いが、複数のルートから問題を掘り下げ、核心に迫る方法は後の作品（習作期では「巡査の居る風景」「D市の七月絨景（一）」など）にも見られるものである。この方法を濱川勝彦氏は「重層的方法」と呼んでいる。

翌年発表された「ある生活」は、旅先の満州で結核に倒れた日本人青年の死への恐怖に満ちた生活を描いたものである。この作品で特に注目したいのは、次に引用する青年の心理である。

彼は近頃よく變な夢を見ます。その夢の中で彼自身が

一箇の流星になつて、無限の宇宙へ轉落するのです。（中略）ただめまぐるしい速力で、彼自身は白く燃焼しながら、無限の轉落を續けるのです。

ここには、中島文学の主調低音の一つである「存在の不確かさ」に対する不安が、すでに表現されている。この頃から、中島を喘息の発作が襲うようになったという伝記的事実との関係も含めて、興味深い点である。

## 第二節 帝大時代から「北方行」迄

ここで取り上げる作品は、大学卒業の年の前後の作と見られる「斗南先生」、昭和九年『中央公論』新人募集で選外佳作となった「虎狩」、未完長編「北方行」の三作品である。

「斗南先生」は、中島が伯父に当たる儒者、斗南中島端を追懐した私記である。主人公三造（中島自身と考えられる）の伯父斗南は、壮士肌の儒学者で、奇矯な言動で人々を驚かせた。三造は死に瀕した伯父の枕元で、自分が伯父を嫌うのは、伯父の中に自分と同じ「乏しさ」があるからで、要するに自分に対する憎悪がそのまま伯父に向いているのだと気付く。中島は「人間は何と己れの心の在り處を自ら知らぬものか」と嘆じている。中島にとって、自分と性質の似通った伯父を知ることが、同時に自分自身を知ることでもあった。「斗南先生」において発見され、方法と

して獲得されたへ自分とは何か」という主題に、中島は生涯執着し続ける。文壇の流行を意識した習作期を脱し、初めて中島独自の文学が生まれた。

「虎狩」は、「巡査の居る風景」同様、当時日本の植民地であった朝鮮の問題を扱っているが、両作品は些か趣きが異なる。「巡査の居る風景」では、中島は朝鮮人の立場から小説を書くこととした。当時、一高生であった中島には、朝鮮人の悲しみを理解しているという確信があったに違いない。作品は少年らしい正義感に満ちているが何処か希薄な印象を与えてしまう。だが、「虎狩」では、そのような姿勢は放棄された。中島は日本人「私」を主人公とし、朝鮮人趙大煥の内面には立ち入らない。「私」も読者も趙の心情を想像するのみで、真実を知ることが出来ない。「私」は淡々と、しかし寂し気に趙との思い出を語る。二人の少年の日常の物語として。そこに民族の壁を越えられなかった二人の友情の悲しさが浮かび上がる。「斗南先生」で獲得された内面を見詰める眼はここでも生かされている。

「北方行」の執筆時期は、昭和八年頃から十二年頃迄と推定されている。中島の野心に満ちたこの長編は、登場人物が出揃い、本格的に物語が展開しようかという所で中断された。「北方行」の二人の主人公・黒木三造と折毛伝吉は、どちらも固定観念の虜となっている。三造は「自分は

作家となるやうに生まれついでゐる」という奇妙な自覚と、「藝術こそは人生に於て最も崇高なものである」という浪漫的な偏見に捕われ、現実には直接触れることが出来ないと感じている。一方、伝吉は「存在の不確かさ」に捕らわれている。彼は周囲が不確かな存在に思われ、「それらが今ある如く、あらねばならぬ理由（必然性）が何處にあるか」と考えずにはいられない人物である。そこに「俗人」の代表であるとともに、民族的な優越者でもある英国人トムソンや、日本から中国に嫁ぎ、日本人にも戻れず、中国人にもなりきれない不安に怯える白夫人なども関わり、「北方行」は中国の内戦（南京政府と北方軍閥の抗争）を背景とした壮大な物語となるはずであった。

では、何故「北方行」は挫折したのか。未完でもあり、中島がこの先をどのように書き継ぐ予定だったのかは分からないが、現存する部分から推測すると、その原因の多くは人物造型にあると考えられる。第一に、三造・伝吉の両主人公が、余りに似通った「精神的<sup>註(2)</sup>双生児」であって、互いに刺戟し合ってダイナミックに物語を展開させてゆく力に欠けているのではないかということ。第二に、三造・伝吉に作者中島の思考が反映され過ぎており、多くの部分が中島自身の思考・心情の吐露に覆われてしまう傾向にあること。第三に、登場人物が長編小説を持続させるだけの魅

力に欠けているように思われること。以上のような理由から、「北方行」の世界は、発展の機会を得ることなく未完に終わってしまったのではないだろうか。

「北方行」は構想の段階での理想が高かった分、中島を深い挫折感に陥らせたであろう。中期の執筆活動は、「北方行」を再構成し、その挫折を克服することから始まる。

### 第三章 中期の作品群

本稿では、中島の教師時代の作品を中期の作品群として扱うこととする。中期の主な作品は、「かめれおん日記」<sup>註21</sup>「狼疾記」<sup>註22</sup>「悟浄歎異——沙門悟浄の手記」<sup>註23</sup>「古譚」<sup>註24</sup>「孤憑」<sup>註25</sup>「木乃伊」<sup>註26</sup>「山月記」<sup>註27</sup>「文字禍」の総題<sup>註28</sup>、「古俗」<sup>註29</sup>「盈虚」<sup>註30</sup>「牛人」の総題<sup>註31</sup>、「光と風と夢」<sup>註32</sup>である。

#### 第一節 中期作品の概観

昭和十一年、中島は「北方行」<sup>註27</sup>をもとに「かめれおん日記」<sup>註21</sup>「狼疾記」<sup>註22</sup>（後、「過去帳」という総題を付される）を執筆していた。中島は「北方行」から壮大な全背景を取り払い、女学校の博物教師の日常を背景に据えた。そして「北方行」の主人公・三造と伝吉が抱いていた悩みを主人公の博物教師一人のものとした。中島の教師生活に取材しているが、特に筋らしいものは無い。主題となっているのは、極度に内省的な主人公の「形而上學的迷蒙」である。

「狼疾記」冒頭の『孟子』からの引用（「養其一指、而失其肩背、而不知也、則爲狼疾人也。」）によれば、一指を惜しむあまり、肩や背を失うのに気付かないのが「狼疾人」であるという。「過去帳」の主人公には、あらゆるものは必然性に欠け、世界は偶然的集まりとしか思えない。彼は「斯うしたことを常に感ずるやうな人間は不具なのかも知れぬ。」と考える。「不具」は、ここでは「狼疾人」と同様の意味合いを持つ。つまり、冒頭のエピグラムの一指とは「存在の不確かさ」とでも言うべき感覚、肩背とは日常の市民としての生活を指していると解釈出来る。中島は「迷蒙」を解決するべく、作品中で二つの解決の道を示している。一つは、〈己が性情に従う道〉である。

畢竟、俺は俺の愚かさに殉ずる外に途は無いぢやないか。凡てが言はれ、考へられた後に結局、人は己が性情の指さす所に従ふのだ。

また、二つ目は、〈迷蒙からの脱出の道〉である。

もつと我執をもて！我慾を！<sup>エクスマネシクワイ</sup>排他的に一つの事に迷ひ込むことが唯一の救ひだ。（中略）粗野な常識を尙び、盲目的な生命の意志にだけ従へ。

このように中島は、「迷蒙」からの脱出の道として「行動」を希求した。実際、彼は思考に拘泥せずに「行動」する人々、言わば「行動者」（「悟浄歎異」）を、自分とは対

照的な人格として「過去帳」に登場させている。国語教師の吉田は、最も典型的な人物であらう。

私とはぐ同年だが、全く此の男程精力絶倫で思ひ切り實用向きで、恥も外聞もなく物質的で、懷疑、羞恥、「てれる」などといふ氣持と縁の遠い人間を私は知らない。疲れる事を知らぬ働き手。有能な事務家。方法論の大家。(本質論など悪魔に喰はれてしまへ!)常に勇氣凜々たる偏見に充ち満ちて、あらゆる事に勇往邁進する男。

吉田は、他人の俸給を調べ上げるような所謂「俗人」(「北方行」)である。だが、「私」は吉田を羨ましく思う。懷疑に捕われ、「行動者」を希求する「私」にとって、吉田のような「俗人」的「行動者」は、羨望の対象となり得たのである。

次作「悟浄歎異——沙門悟浄の手記」の主人公は、『西遊記』の沙悟浄である。自分を一行の中の「調節者」でしかないと感じていた悟浄にとって、見習うべきは非凡な「行動者」悟空であった。

悟空は確かに天才だ。(中略)其の面魂にも其の言葉つきにも、悟空が自己に對して抱いてゐる信頼が、生々と溢れてゐる。(中略)彼の側にゐるだけで、此方までが何か豊かな自信に充ちて来る。

「過去帳」の吉田評のような皮肉な眼はここには無く、悟空に純粹な憧憬を抱いていることが分かる。初めて俗物性を感じさせない真の「行動者」が登場したのである。

また、悟浄は一見ひ弱な三蔵法師の内面の貴さに氣付く。悟浄は理想とし、目指す目標は三蔵法師の境地であると感じつつも、当面自分は「行動者」悟空から学ぶべきだと考える。物語は、悟浄の変貌を予感させて終わる。「古譚」「古俗」は、共に古代世界を舞台とした物語的作品であり、主人公の運命を操る人知を越えたものの存在を感じさせる点で共通している。だが、「古譚」四編は主に言葉に取り付かれた人々の悲劇を扱っており、「古俗」二編では人知を越えた、主人公を陥れる運命の皮肉がより強く描かれている。中島は人知を越えた存在を「世界のきびしい悪意」(「牛人」と呼んでいる)。

「光と風と夢」は、『宝島』の作者ステイヴンソンのサモア島での生活を描いている。この作品は早くから「主題の分裂」が指摘されている。ステイヴンソンが南洋の人々への愛情から、英米独の植民地における主権争いに身を投じてゆく様を描いた章と、ステイヴンソンの日記を中心とした自己告白の章が交互に配置されており、一見、散漫な印象を受けるのである。前者は以前の主人公像には見られなかった行動性に満ち、後者はより中島の懷疑が投影され

ている。注目すべきは自己告白の章のステイヴンソンにも、懐疑からの脱出を可能とする明るさのある点である。自嘲的な自己への疑いの後、彼はこう考える。

夜八時、すっかり元氣になった。ウィア・オブ・ハーミストンの今迄書溜めた分を読みかへす。悪くない。悪くないどころか！

今朝はどうかしてあつた。俺が下らない文學者だと？（中略）概念で以て俺を輕蔑する奴も、實際に俺の作品を読んで見れば、文句なしに魅せられるに決つてゐるんだ。俺は俺の作品の愛讀者だ。

中島は自分と同様に病身でありながら、自信と行動力を併せ持つ、實在の作家ステイヴンソンに自己を重ね合わせることで、懐疑からの脱出を求めたのかも知れない。

#### 第二節 中期作品における人物像

以上のように、中島文学を登場人物を中心に見ていくと、中島の登場人物の造型に或る傾向があることに気付く。そこで、中期作品で重要な位置を占める登場人物を、以下の四つに類型化し、その特質を検討する。

- (一) 中島の懐疑が投影された人物
- (二) 「俗人」或いは「行動者」
- (三) 「世界のきびしい惡意」を体现する人物
- (四) 「超越者」

一人の人物が、幾つかの特徴を併せ持っていることもあり、厳密な意味での類型化は難しいが、一つの実験として試みてみたい。

#### (一) 中島の懐疑が投影された人物

中島の懐疑とは「存在の不確かさ」に関する不安、更にはそこから生じる「自分とは何か」という疑いのことを指す。登場人物に作者の個性が投影されるのは当然のことだが、中島の場合、時に作者が登場人物の懐疑に拘泥するあまり、作者と登場人物の境が曖昧になり、作品全体が停滞する傾向があつた。それは特に、中期前半の私小説風の作品に多く、「過去帳」やその直前の作「北方行」が典型的な例である。だが、「悟淨歎異」以降、主人公像に変化が生じる。この時期と前後して成つた中島の歌稿「遍歴」に、次の一首が見える。

ある時はファウスト博士が教へける「行爲イデオロギ」によらで汝  
れは救はれじ」

主人公像の変化の背景には、中島自身の強い「行動」への希求があつた。中島は「悟淨歎異」以降、思考と行為の直結した「行動者」を侮辱を交えた羨望をもって眺めるのではなく、主人公が見習うべき憧憬の対象と位置づけていく。主人公の懐疑に脱出の道が見え始めたのである。



## (二)「俗人」或いは「行動者」

ここに挙げる人物は、主に主人公（中島の存在論的懷疑を担う人物）に対する他者として登場する。自分だけが異質であるという強い孤立感に苛まれていた中島にとっての他者とは、必然的に中島とは対照的な人物とならざるを得ず、その個性も限定される。「人々が夙<sup>もと</sup>の昔に卒業して了つた事柄」（「狼疾記」）に、真摯に取り組む人物（「主人公」）に対して、それを忘れた振りをし、何食わぬ顔で日々の生活を営む人物（「他者」、また、思考のレベルで逡巡する人物（「主人公」）に対して、思考と行動が密接に繋がっている人物（「他者」、それが中島にとっての他者、即ち「俗人」や「行動者」なのである。

他者（「俗人」）の系譜は、「北方行」の英国軍人トムソンに遡る。中島の存在論的懷疑が前面に押し出されるようになったこの時期、「俗人」が他者として登場した。この「俗人」振りは、「過去帳」の国語教諭吉田に受け継がれていく。

中島は「俗人」として一見如才なく立ち回っている人々の表面の姿のみを描き、その内面に立ち入ることはない。極端に戯画化された彼らは、近代的憂鬱に捕われていると密かに自負する主人公の軽蔑の対象であり、主人公の孤立感を強める羨望の対象なのである。

だが、彼ら「俗人」は、「悟淨歎異」において、「行動者」へと変貌を遂げる。それは、他者から俗物性が消えたことを、また、主人公の軽蔑と羨望に満ちた視線が純粹な憧憬に変化したことを意味する。

「光と風と夢」においては、「行動者」的要素は、中島の懷疑を有した主人公・ステイヴンスンに取り込まれた。「行動」を希求し続けていた中島の人物は、実在の作家に自己を重ね合わせることでようやく「行動者」に変貌することが出来たと見えよう。

(三)「世界のきびしい悪意」を体现する人物

中島は早くから「人間の自由意志の働き得る範囲の狭さ」（「狼疾記」）を感じていた。

俺達は、俺達の意志でない或る何か譯の分らぬもののために生れて来る。俺達は其の同じ不可知なもののために死んで行く。げんに俺達は、毎晩、或る何ものかのために、俺達の意志を超絶した睡眠といふ不可思議極まる状態に陥る。（「狼疾記」）

人間の運命を悪意に満ちた手で弄ぶ存在である「世界のきびしい悪意」、その「悪意」を体现する人物は、中島作品にしばしば登場する。中期では「牛人」の豎牛が特に象徴的である。いわれない迫害を受けながら、その前では人は恐れ、遜る以外にない、それが「世界のきびしい悪意」

なのである。

また、この「惡意」は、人間の姿をとらないことも多い。例えば、「古譚」では「惡意」は人物としては現れない。だが、全体に重苦しい雰囲気が高い、「惡意」に満ちた手で人間の運命を操り、嘲笑う何者かの存在を感じさせる。現実離れた存在の彼らは、中島文学の特色ある人物像と言えよう。

#### (四)「超越者」

世俗を超越した、限りなく理想的な人物として登場する人物を、「超越者」と呼ぶことにする。中期作品では、「悟浄歎異」の三蔵法師がそうである。中島は常々「何事をも、(身の程知らずにも)永遠と對比して考へるために、先づその無意味さを感じて(中略)一切の努力を抛棄して了ふ」(「かめれおん日記」)傾向に悩んでいた。中島の分身である「悟浄歎異」の悟浄も同様である。だが、三蔵法師は、永遠と比べれば、ごくはかない地上の存在の滅びの運命を知りながら、尚も正しく美しいものを求める勇気を失わない人物である。中島は、三蔵法師を「行動者」悟浄に学んだ後の悟浄が目指すべき、究極の理想として設定している。

## 第四章 後期の作品群

後期では、南洋から帰国した中島が死去する迄に書いた四作品「悟浄出世」<sup>註(28)</sup>「弟子」<sup>註(30)</sup>「名人傳」<sup>註(31)</sup>「李陵」<sup>註(32)</sup>を扱う。尚、「南島譚」<sup>註(33)</sup>「環礁」<sup>註(34)</sup>は、南洋の珍しい風物や習慣の紹介文の性格が強く、人物像の検討には向かないので、本稿では対象より除外した。

### 第一節 後期作品の概観

南洋から帰国した中島は、昭和十七年春頃「悟浄出世」を脱稿する。主人公はやはり沙悟浄で、作品集「南島譚」収録の際、「わが西遊記」という総題の下に、「悟浄歎異」と共に掲載された。流沙河の河底に住む悟浄は懷疑に捕われ、答えを求めて諸賢人の間を遍歴するが、救われず、観音菩薩のお告げにより、三蔵法師の一行に加わる。この作品においても、苦悩する悟浄は中島の分身に近い存在である。中島は悟浄ら妖怪の特徴を次のように描いている。

何故、妖怪<sup>ばいも</sup>は妖怪であつて、人間でないか？彼等は、自己の属性の一つだけを、極度に、他との均衡<sup>うんぱん</sup>を絶して、醜い迄に、非人間的な迄に、發達させた不具者だからである。(中略)彼等はいづれも自己の性向、世界觀に絶對に固執してゐて、他との討論の結果、より高い結論に達するなどといふ事を知らなかつた。

この妖怪の描写は、「狼疾人」を思わせる。中島が妖怪を主人公に据えたのは、やはり自身の「狼疾」を追求する為であった。

もう一つ「悟浄出世」において注目すべきは、悟浄が懷疑から脱出するべく、実際に「行動」している点である。

悟浄は「自己、及び世界の究極の意味」の答えを求めて、河底の諸賢人を訪ねる。彼ら賢人達の思想は、実在した著名な思想家をもとにしている。中島は読書を通じて接した古今の思想を「悟浄出世」の世界に登場させた。つまり悟浄の遍歴は、中島自身の読書を通じた遍歴そのものであった。

「弟子」は、游侠の徒・子路が孔子の弟子となつてから、衛の政変に巻き込まれて死ぬ迄の半生を扱っている。子路は理想的な「行動者」である。純粹な敬愛の情から孔子に従い、信念に従って主人孔惺を救おうとして殺された。彼の「行動」の基準は、常に自分の内にある。

一方、孔子は子路の最大の理解者だった。孔子だけは、子路の美点「純粹な没利害性」を徳として認めていた。それだから衛の政変の際の子路の悲劇的な死を予言することにもなった。「弟子」という作品では、常に先が見え過ぎる人の哀しみを湛えた目で、子路を見詰め、永遠を見詰める孔子の姿が背後にある。それは、中期作品「悟浄歎異」

の三蔵法師の姿を彷彿とさせる。

「名人傳」の執筆時期は不明だが、「弟子」よりも遅い、昭和十七年九月以降の執筆であろうと考えられている。『列子』を素材として、主人公の紀昌が師に就いて、真の弓の名人となるまでを描いている。

「李陵」は、中島の死の翌年の昭和十八年、『文學界』七月号に発表された。中島の死後、中島夫人から原稿を託された先輩作家深田久彌氏によると、原稿は「推敲で真黒」になっており、「題すらついていなかった」という。ただ、数枚の浄書原稿も遺されているということだから、中島自身でほぼ満足いくまで手を加えた、完成品に近い原稿であったと考ええていいであろう。題は深田久彌氏によって出来るだけ主観を入れない「李陵」が選ばれたが、遺されたメモに「漠北悲歌」の語があり、これが題であった可能性も捨てきれない。

「李陵」は、漢の武帝の治世、無謀な匈奴討伐に赴き、心ならずも匈奴に降った李陵と、李陵を弁護した各で宮刑に遭いながらも、生涯を『史記』の完成に捧げた司馬遷を中心とした物語である。「李陵」には、武帝の治世下の三人の人物が描かれている。「断片二十九」に、「中央公論行原稿」の執筆予定が遺されているが、他の作品の題名と並んで、「李陵・司馬遷」の書き込みが見えることから中島が

主人公として設定していたのはこの二人であったと推定出来る。李陵と司馬遷の二人の半生を、初期作品から用いていた「重層的方法」によって中島は見事に描き切った。

## 第二節 後期作品における人物像

以上の後期四作品における人物像を、第三章同様、四つに類型化し、検討する。中期から後期へかけての登場人物像の変化に合わせ、分類方法を一部変更し、次の通りとする。

- (一) 中島の懐疑が投影されているが、懐疑からの脱出を求め「行動」する人物
  - (二) 「行動者」
  - (三) 「世界のきびしい悪意」を体現する人物
  - (四) 「超越者」二種
- (一) 中島の懐疑が投影されているが、懐疑からの脱出を求め「行動」する人物

初期・中期作品の主人公級の人物は、殆どが中島の懐疑が投影された人物であった。彼らは、懐疑からの脱出を求め、あまり、「俗人」を羨望の眼で、「行動者」を憧憬の眼差して見ていた。懐疑から逃れるには「行動」が不可欠だと知りながら、「行動」の手前で逡巡する人々であった。

だが、後期の人物は、存在論的懐疑に捕らわれていても、脱出の道を模索し、現状を打開する為「行動」を起こす。

「悟淨出世」の悟淨や、「李陵」の司馬遷がその例である。勇気を以って「行動」し、努力した彼らに完全な救済が与えられることはない。だが、よりよい生を求めた彼らの生涯は、中期の主人公達より充実していたと言えよう。

では、この人物像の変化は何故生じたのか。おそらく中島はこの時期、中島本人の成長したこともあって、登場人物の懐疑をかなり客観的に眺められるようになっていたであろう。後期は中期のような私小説風ではない、古典に取材した作品が多いことも、中島が主人公と同化してしまふ危険性を減少させたはずである。それに従い積極的に懐疑からの脱出を図る人物が増えたのであろう。

## (二) 「行動者」

「天下第一の弓の名人」になる為、他を顧みず修業した「名人傳」の紀昌。純粋な憧憬から孔子に従い、衛の政変で命を落とした「弟子」の子路。この二人は、典型的な「行動者」であろう。

だが、死に際しての二人の状況は大きく異なっている。節を貫き、悲劇的だが充実した一生を終えた子路に対して、生涯を捧げた弓の名をも忘れ、「煙の如く静かに世を去つた」紀昌の死はあまりにも空虚である。「行動」の先のより充実した生を求めた中島文学において、「行動」することによってより空疎な死を迎えることになった紀昌をどう

位置づければ良いのか。この問題に関して、木村東吉氏の論文<sup>(註38)</sup>が示唆に富んでいた。木村氏は、紀昌の修業は「天下第一」の名を求める為であり、弓技自体に対する愛着からの行動ではないことに注目した。そして、紀昌の志す「天下第二」の名を得るには「我」を滅却する「不射之射」の技を会得しなければならぬが、一度「我」を滅却した時点で、自らの名を天下に顯示しようとする紀昌の志自体が無意味になることを指摘した。この説に従えば「木偶の如く愚者の如き容貌に變つ」た紀昌の変化や、晩年、弓の名さえ忘れてしまった理由も理解出来る。

また、木村氏は、紀昌は「弟子」の子路と比較して、「子路の場合は、たとえ孔子から批判されようともその生き方に動搖は無く、紀昌の場合は、自分より優れた者に出<sup>(7)</sup>合う度に自身を飛躍させるか、或いは相手を殺すかしなければならぬことになる。」と述べている。同じ「行動者」であつても、世俗的な名声を求める紀昌は、子路のような「純粋な没利害性」(「弟子」)の美しさを見せることはない。中島が紀昌より子路により強い共感を示している理由がここにはある。

また、「李陵」前半部分の李陵も「行動者」的要素を持つていると言えよう。

### (三)「世界のきびしい悪意」を体现する人物

「世界のきびしい悪意」とは、その悪意に満ちた手で人間を翻弄し、破滅に至らしめる存在であり、後期作品では「李陵」の武帝が典型的な例と言えるだろう。武帝は次のように描かれる。

即位後四十餘年。帝は既に六十に近かつたが、氣象の烈しさは壯時に超えている。(中略)年と共に群臣への暗い猜疑を植ゑつけて行つた。李蔡・青翟・趙周と、丞相たる者は相ついで死罪に行はれた。(中略)硬骨漢汲黯が退いた後は、帝を取り巻くものは、佞臣に非ずんば酷吏であつた。

武帝は、中期作品「牛人」の豎牛のような怪奇性を帯びてはおらず、より人間的である。だが、人間的であることが、却つて始末が悪いという面もないわけではない。帝王の気紛れさで、一度許した李陵の家族を処刑し、自ら任命した丞相を死罪にするようなこともある。また「牛人」の豎牛にはなかつた。孤独を武帝が感じさせるのも、その人間らしさ故であらう。

### (四)「超越者」二種

「超越者」とは、文字通り世俗を超越した人物を指す。この定義によると、後期作品には二人の異なった種類の超越者が存在することになる。一人は、世俗を超越し、すべてのものの運命に絶えず哀れみの眼差しを向けている、中

期作品「悟淨歎異」の三藏法師の性格を受け継ぐ人物。もう一人は、「行動」することはないが、ひとり信念を貫き、それ故に他の人々を超越している人物である。前者の例は「弟子」の孔子、後者は「李陵」の蘇武である。子路は孔子を次のように評する。

子路が今迄に會つた人間の偉さは、どれも皆その利用價值の中に在つた。(中略)孔子の場合は全然違ふ。ただ其處に孔子といふ人間が存在するといふだけで充分なのだ。

また、蘇武は次のように描写される。

此の男は自分の行動が漢に迄知られることを豫期してゐない。(中略)誰にもみとられずに獨り死んで行くに違ひない其の最後の日に、自ら顧みて最後まで運命を笑殺し得た事に満足して死んで行かうといふのだ。誰一人己が事蹟を知つてくれなくとも差支へないといふのである。

孔子の描写は、豊かでおおらかな、包容力のある人物を思わせるが、蘇武の描写は、何処か滑稽な片意地を感じさせる。その点で、両者は全く違った性格を有した人物であるが世俗の利害を超越し、その生き方が周囲の人々に影響を与えているという点で、似通つた面のある人物像だと考えられるのである。

## 結論

中島の執筆活動は学生時代から始まつた。習作期の中島は、当時、文壇の流行であつた新感覺派の文学や、プロレタリア文学の影響の下に執筆を開始した。だが、その影響は、文体の模倣や、社会的なテーマの設定などの表面的な部分に止まつており、實際は若い中島のロマンティズムが強く押し出された、観念的とすら言える習作群であつた。

しかし、それらの習作は、作家中島敦の可能性を感じさせる多くの要素を備えてもいた。一つの物事を多面的に捕らえる「重層的方法」の獲得や、当時としては珍しく朝鮮の問題を朝鮮人の立場で描こうとした試みは、中島の視点の非凡さを感じさせる。また、内容に合わせて巧みに文体を変えている点や、次第に人間理解が深みを増してゆく過程は、高校生らしくらぬ力量を感じさせるものであつた。

伯父・斗南中島端を追懐し、自己を見詰め直した私記「斗南先生」で、中島は文壇の流行を意識していた習作期を脱する。(自分とは何か)の追求という文学的テーマを獲得し、初めて中島独自の文学が生まれた。この自己の内面を見詰める眼は、次作「虎符」においても生かされた。未完長編「北方行」では、中島固有の存在論的懷疑が、はつきりと前面に押し出されることになつた。だが、中島自身

が自らの懷疑に拘泥し過ぎた為か、未完のまま中断された。

中期は「北方行」の世界を構築し直した作品「過去帳」を執筆することから始まった。身近な教師生活に題材を求め、自らの存在論的懷疑を徹底して追求した。この作品はあまりに作者の自己告白が多く、筋らしいものがほとんど無い為に、「感想文としては面白いが、小説としては取れない気がした。」<sup>(註3)</sup>などと評されかねない危うさも秘めていた。だが、「悟淨歎異」において、古典世界・非現実世界に題材を求めつつ、自らの懷疑に取り組む方法を発見した後は、中島文学の代表作とされる個性豊かな作品を生み出してゆく。特に、「山月記」で「行動」することなく破壊していった詩人李徴を、「光と風と夢」では「行動」して作家としても人間としても充実した生涯を送った英国人作家ステイヴンソンを描き、芸術家としての生き方を追求した。

後期は、中島が南洋庁を辞任し、職業作家として立った後、死去する迄の数ヶ月間とした。この時期、中島は「行動者」を多く描いた。そればかりでなく、存在論的懷疑に捕われた登場人物も「行動者」的要素を有するようになった。「悟淨出世」の悟淨は、「自己」、及び世界の究極の意味」を求めて、諸賢人の間を遍歴した。また、「弟子」の子路を通じて、自らの内にある信念に従って「行動」し、悲劇

的だが充実した生涯を送った「行動者」を、更に「名人傳」の紀昌を通じて、世間的な名誉を基準に「行動」し、空虚な死を迎えた「行動者」を描いた。そして、「重層的方法」を駆使した大作「李陵」で、巨大な運命の前に翻弄される二人の實在の人物、李陵と司馬遷の姿を鮮やかに描き出した。

このように中島文学の登場人物像の変遷を調べ、登場人物像を検討していき気が付いたのは、中島の文学世界が主人公(場合によっては中島自身)の強烈な自我を中心に構成されているということである。「我」との対比で「俗人」「行動者」が、「我」を脅かす、或いは見守る存在として「世界のきびしい悪意」「超越者」が生み出された。彼ら中島文学特有の他者は、「我」あるが故の存在であり、「我」が無ければ存在し得ない。このような他者像が誕生した背景には、中島文学の主題が大きく関係している。中島の創作活動は、存在論的懷疑という特有の不安に捕われた中島自身の「我」を追求する過程であった。中島文学は、へ自分とは何かをを求める文学であると言えよう。

註記

註(1)中村光夫他編者『中島敦研究』(昭和五十三年十二月二十五日、筑摩書房)に収録。

註(2)前掲『中島敦研究』収録の「お礼にかへて」(中島タカ)による。

註(3)『文學界』昭和十七年二月号に発表。

註(4)『表現』昭和二十三年春季号(五月)に一部発表された。全文は第一次『中島敦全集』第三卷(昭和二十三年十月五日発行、筑摩書房)に初めて収録されたが、後、欠落部分が見付かり、文治堂版『中島敦全集』第二卷(昭和三十五年六月)収録の際補われた。

註(5)「孤憑」「木乃伊」「山月記」「文字禍」の四編から成る。「山月記」「文字禍」の二編のみが、「古譚」と題して『文學界』(昭和十七年二月号)に発表された。後、『光と風と夢』(昭和十七年七月十五日、筑摩書房)には四編とも収録された。

註(6)『文學界』(昭和十七年五月号)に初出。

註(7)この期の最終的な候補作は六編、該当作は無しとされた。主に「光と風と夢」と「松風」(石塚友二)が議論の対象となった。予選委員は宇野浩二、瀧井孝作、佐佐木茂索、川端康成。「光と風と夢」は、室生犀星

が一票を投じ、川端康成が「松風」の次に推したのみで、全体に不評だった。

註(8)『校友會雜誌』(昭和二年十一月、第三一三号)に収録。

註(9)『校友會雜誌』(昭和三年十一月、第三一九号)に収録。

註(10)註(9)と同じ。

註(11)『校友會雜誌』(昭和四年六月、第三二二号)に収録。

註(12)註(11)と同じ。

註(13)『校友會雜誌』(昭和五年一月、第三二五号)に収録。

註(14)大正十五年(一九二六)一月から二月にかけて『文芸時代』に掲載され、翌昭和二年三月、短編集『伊豆の踊子』として出版された。

註(15)『文學界』昭和十八年七月号に初出。

註(16)濱川勝彦「中島敦序論——初期作品を中心に——」(京都大学国文学会編『国語国文』第三八卷・四号、昭和四十四年四月)

註(17)前掲『光と風と夢』(昭和十七年七月十五日、筑摩書房)に初出。

註(18)前掲『光と風と夢』に初出。中島の水上英広氏宛はがき(昭和九年七月十七日付)に次のような一節がある。

虎狩、又してもだめなり。但し何とか佳作と稱す



るところに、はひつてゐる。なまじつか、そんなところに出ない方がよかつたのに。すこしいやになる。この時の応募総数は一四八五編。当選作は、島木健作「盲目」、丹羽文雄「贅肉」、平川虎臣「生き甲斐の問題」、石川鈴子「無風地帯」の四編。「虎狩」は選外佳作十編の八番目。

註(19)註(4)と同じ。

註(20)佐々木充著『近代文学資料1 中島敦』(昭和四十二年三月十五日、桜楓社)

註(21)『南島譚』(昭和十七年十一月十五日、今日の問題社、

『新鋭文学選集2』)に初出。

註(22)註(21)と同じ。

註(23)前掲『南島譚』に初出。

註(24)註(5)と同じ。

註(25)『政界往来』(昭和十七年七月号)に初出。但し、「盈

虚」は、「或る古代人の半生」と題されており、前掲

『南島譚』収録の際、現行の題名に改められた。

註(26)註(6)と同じ。

註(27)註(4)と同じ。

註(28)前掲第一次『中島敦全集』第三巻に初出。

註(29)前掲『南島譚』に初出。

註(30)『中央公論』昭和十八年二月号に初出。

註(31)『文庫』昭和十七年十二月号に初出。後前掲第一次全集第一巻に収録された。

註(32)『文學界』昭和十八年七月号に初出。

註(33)前掲『南島譚』に初出。

註(34)前掲『南島譚』に初出。

註(35)前掲『中島敦研究』収録の「故中島敦君」(深田久彌)による。

註(36)前掲第一次『中島敦全集』第三巻収録の「断片二十九、三十」による。

註(37)前掲第一次『中島敦全集』第三巻に収録。

註(38)木村東吉「名人伝」とその脊景」(『島大國文』第十二号、十月)。

註(39)第二次『中島敦全集』(昭和五十一年九月)収録の深田久彌の中島宛書簡(昭和十七年三月三十一日付)による。

※尚、本文中の中島作品からの引用は、すべて第二次『中島敦全集』全三巻(昭和五十一年、筑摩書房)をテキストとした。

《主要参考文献》

- ・第一次『中島敦全集』全三巻(昭和二三・十、筑摩書房)
- ・第二次『中島敦全集』全三巻(昭和五一・三・九、筑摩書房)

・『中島敦全集』全三卷（平成五・一～五、筑摩書房、  
『ちくま文庫』）

・中村光夫他編著『中島敦研究』（昭和五三・十二、筑摩  
書房）

・佐々木充著『中島敦——近代文学資料10』（昭和四三・  
三、桜楓社）

・佐々木充著『中島敦の文学——近代の文学10』（昭和四  
八・六、桜楓社）

・濱川勝彦『中島敦の作品研究——国文学研究叢書』（昭  
和五一・九、明治書院）

・田鍋幸信編著『中島敦・光と影』（平成元・三、新有堂）  
・鷺只雄編著『中島敦——叢書 現代作家の世界5』（昭  
和五二・四、文泉堂出版）

・木村一信著『中島敦論』（昭和六一・二、双文社出版）  
・福永武彦編『中島敦 梶井基次郎——近代文学鑑賞講座  
第十八卷』（昭和三四・十二、角川書店）

・鷺只雄編『梶井基次郎 中島敦——日本文学研究資料叢  
書』（昭和五三・二、有精堂）

・川端康成『伊豆の踊り子』（昭和二五・八、新潮文庫）  
・勝又浩「我を求めて——中島敦による私小説論の試み」  
（『群像』昭和四九・六月号）

・濱川勝彦「中島敦序論——初期作品を中心に——」（昭

和四四・四、京都大学『国語国文』第三八卷・第四号）

・鷺只雄「中島敦の青春——高時代の初期の作品」（平  
成元・三、都留文科大『国文学論考』第二五号）

・山下真史「中島敦『虎狩』論」（昭和六二・九、東京大  
学『国語と国文学』第六四号）

・藤野恒男「狼疾期」をよむ（平成三・十二、『仁愛国  
文』第九号）

・藤村猛「悟浄歎異」論（平成二・二、『安田女子大・  
紀要』第十八号）

・藤本千鶴子「山月記」の自尊心と羞恥心（昭和六十・  
三、『甲南国文』第三二号）

・越智良二「中島敦「木乃伊」覚之書」（昭和六三・十二、  
『愛媛国文と教育』第二十号）

・藤野恒男「盈虚考」（昭和六二・十二、『仁愛国文』第  
五号）

・越智良二「牛人」の基底（昭和五五・三、安田女子大  
『国語国文論集』第九号）

・渡邊ルリ「光と風と夢」試論（昭和六三・十、『叙説』  
第十五号）

・藤野恒男「悟浄出世」論（平成二・十二、『仁愛国文』  
第八号）

・木村東吉「中島敦『弟子』論」（平成元・十二、『国語と

国文学』第六六卷)

・木村東吉『『名人伝』とその背景』(昭和五八・十、『島  
大國文』第十二号)

・越智良二「中島敦論——「李陵」に就て」(昭和六三・

二、『愛媛大学教育学部紀要(第二部 人文・社会科学)』  
第二十号)